

漢法苞徳塾資料	No. 265
区分	治療論・補瀉
タイトル	補瀉泄除の鍼法の問題
著者	八木素萌
作成日	1992.10.10

★「触診の虚実」の虚実も「脈診」の虚実も補瀉決定の決め手ではないという『内経』『難経』の記述と、これを敷衍した後世の記述の一つを見た。この補瀉決定論の明瞭な立場が、日本では十分に受け継がれて来てはいない。この点は江戸期の鍼灸とは違って見受けられる。このイキサツの研究と考察が必要であろう。

★『靈枢』九針十二原第1の「…凡用鍼者 虚則実之 満則泄之 宛陳則除之 邪勝則虚之…」は鍼運用を四つに大分類している。

ここでの「宛陳」については今日に言うところの「細絡」「血絡」であるが、「満」は解明不足である。

『靈枢』九針十二原第1を解説する重要な篇と見なされている『靈枢』小鍼解第3には

「…往者為逆者 言氣之虚而小 小者逆也 来者為順者 言形氣之平 平者順也 明知逆順 正行無問者 言知所取之処也…」

「…迎而奪之者瀉也 追而濟之者補也 所謂虚則実之者 氣口虚而当補之也 満則泄之者 氣口盛而当瀉之也 宛陳則除之者 去血脈也 邪勝則虚之者 言諸經有盛者 皆瀉其邪也…」 「…徐而疾則実者 言徐内而疾出也 疾而徐則虚者 言疾内而徐出也…」

のように記述されている。

ここには、二つの問題がある。「虚」に「補」す判断は「氣口虚」に従うのである、「実」に「瀉」すのは「諸經有盛」は「邪勝」だからであると把握している、つまり「虚実」の判定尺度が異質なのである、此れが一つの問題点である。